

原爆は人を滅ぼす

語り手 相川 キミ子

中央二丁目

戦争のため外地、内地に転々と

私は一九二二（大正二）年九月二日、当時、日本の植民地だった、朝鮮半島の「京城」（けいじょう）（現在、大韓民国の首都ソウル）で生まれました。父親が亡くなり私を育てることができなくなった母親は、小学校一年生の私を、中国東北地方の大連にいた伯父に預けました。伯父は満州鉄道に勤めていました。

私は、大連で始まった勉強についていけなくて、「お前はだめだ」と伯父によく怒られ、メソメソと泣いていました。そんな時、育ての母が私に「伯父さんはあなたのことを思って怒っているのだから、勉強しなさい」と言ってくれたおかげで、私は一生懸命勉強しました。試験でいい点数が取れると、伯父は「やればできるんだから」と初めて優しい言葉をかけてくれました。私はうれしくなり「ほめられるんだったら、ほめられることをしよう」と勉強に打ち込みました。こうしたがんばりを経験したおかげで、私は後に助産婦と看護婦の免許を取ることができました。このがんばりの精神はいまも生き続けています。

私が免許を取ると、伯父は「手に職をつけて、お姉さんの役に立つようになったら戻しますから」という約束を守り、私を母の所にもどしてくれました。その後、私たち家族は母の実家がある長崎、そして東京の四谷区（現在の新宿区）に住むことになりました。しかし、太平洋戦争末期の一九四五（昭和二〇）年三月十日未明、東京は大空襲をうけ、病気だった私は二人の弟とともに疎開することになり、母の兄にあたる伯父が住む長崎市に移りました。

土が伯母の息子の形見に

八月九日、長崎に原爆が投下された日、私は長崎港から連絡船で二〇分で渡れる高島たかしまという島にいました。高島は三菱炭鉱の島です。私は、高島にある伯父が借りていた社宅で一人留守番をしていました。当時は三二歳でした。

午前十一時二分。ゴォー、ドーンという大きな音と、ピカッと青い光線が、開いていた縁側や窓から、ものすごい速さで部屋の中を突き抜けました。

親戚や友人の多くはカトリック信者で、爆心地から北東約五〇〇メートルにあたる浦上^{うらかみ}方面に住んでいましたが、この原爆で約五〇人が亡くなりました。

「町は全滅」との知らせに、私は十日、ようやく動き出した連絡船に乗って長崎市に入りました。連絡船は大浦の棧橋に着き、昨夜の大火の火がまだくすぶる中、中町^{なかまち}(爆心地から南東三キロメートル)にある伯父の自宅に急ぎました。自宅はガラスが割れ、屋根瓦が飛び、空がのぞいていました。伯父、伯母、二人の弟は無事でしたが、伯父の長男がいません。長男は長崎医科大学(爆心地から東五〇〇メートル)の学生で二〇歳でした。九日の朝、警戒警報が続いている中、家族が止めるのも聞かず、講義があるからと通学し、行方不明になりました。長男は一人息子。伯母は老いた体にもめげず、毎日、長男を探しに出かけました。

大学周辺はひどい様でした。全身火傷で頭の毛は焼け落ち、鼻先がそがれ、耳たぶは千切れ^{ちぎ}て、虫の息になって「水ー、水ー」と叫ぶ人、「水をくれー」と足にすがりつく人。伯母は構内に入り、悪臭の中、教室の死骸一つ一つを見てまわったそうです。

長男は、被爆前日の八日の夜、「広島で六日被爆した学長から今日講義を受け、『自分は防空壕に入り助かった。長崎でも広島のような事が起きたら、必ず防空壕に入り、顔を両手で覆いな

さい』と言われた」と家族に話したそうです。そして、九日の朝通学する時、伯母に「お母さん、夕べ話をしたように、空襲警報が鳴ったら必ず壕に入るのだよ」と注意を与えたそうです。これが最後の言葉でした。

伯母は「長男があれだけ自分に注意したとけん、本人は必ず助かっておると思うよ。火傷して動けず、家族を待っていると、思うけんね」と長男の無事を信じ、毎日探すのでした。しかし、見つかりません。将来を楽しみに育てていただけに気丈な伯母も、とうとう涙を流しました。

八月十五日、終戦を知らせる天皇の玉音放送が流れました。放送を聞いた伯母は、「どうせ負けるなら、もつと早ように止めとればよかとに。これじゃ息子がかわいそうじゃなかね。」と声を詰まらせました。

終戦から四、五日過ぎた日、伯母は袋に少しの土を入れ帰ってきました。その理由を伯母に聞きました。その日、大学の教室の中にあつた死体が茶毘^{だび}にふされていました。伯母は、その死体の中に長男と同期の友人の死体を見つけました。友人は後頭部が飛び出ていた人で、頭蓋骨の形からその人とわかつたそうです。伯母は長男も一緒だっただろうと思いましたが、遺骨を持ち帰る気にはなれず、その場の土を一つかみしてきたそうです。

惨状に感情もなくなった

私は十一日、親戚の安否を知るため、浦上方面に向かいました。長崎駅から浦上方面に通じる県道は通れなくて、市の西部にある金比羅山を登り、西山水源地を回りました。本原町（爆心地から北東一・五キロメートル）にある姉の主人（義兄）の家に着きました。九日、仕事で博多に出ていた義兄によると、岡町（爆心地から北二〇〇メートル）に住む姉（三五歳）は、小学校に上がったばかりの長女と次男をかばうように体を重ねたのか、一塊になって焼けこげ、死んでいたそうです。岡町に住む義兄の両親は、畑で爆風に飛ばされショック死しました。義兄の妹は母屋の下敷になりましたが、かすり傷で済みませんでした。しかし、一年後に死亡しました。

岡町の北東の橋口町（爆心地から北東五〇〇メートル）に住む従兄弟の妻（二八歳）は、子供二人（五歳、二歳）とともに家が全壊したため行方不明となり、近所の親戚も全滅でした。近所の友人は、母屋の外にあるお手洗いの取っ手をにぎったまま死んでいました。服はやぶけていましたが体は焼けておらず、爆風によるショック死だったのでしょうか。その友人は夫を戦死で亡くし、故郷にもどって来たばかりでした。

十四日、義兄の家に向かうため、今度は県道を通り、爆心地の松山町を歩きました。真っ黒に焼け残った骨組みだけの電車の中で、人が立ったまま死骸になっていました。爆風により一瞬真空状態ができたため、息ができなくなったのでしょうか。川

には腹がふくれた死体があり、川辺には吹き飛ばされた大人、子どもの白骨死体がいっぱいありました。皮が引き裂かれたその骸骨の顔は、苦しかったという表情に見えました。馬が立ったまま死んでいる姿もありました。

まだ生きている人もいましたが、助けようもありませんでした。多くの悲惨なものを見ても、すでに私は怖さを超越して、涙も出ませんでした。今思うと、人間も無感情になることができるのだと不思議な気持ちです。

被爆者との結婚、そして苦勞

戦後二年目の一九四七（昭和二二）年の春、私は結婚しました。私は三五歳、夫は三四歳でした。夫は被爆者で、五人の子どものうち二人、そして奥さんを原爆で亡くした人です。突然三人の子ども（女十五歳、女九歳、男七歳）の母親になって戸惑いましたが、私自身、継母（大連の伯父夫婦）に育てられましたから、三人の子どもたちの気持ちもわかると思います。「亡くなった奥さんの気持ちになって、かわりに立派に育ててみせる」と決心をしたのです。

夫の家族は城山町市営住宅（爆心地から西五〇〇メートル）に住んでいました。主人は家が米屋だったこともあり、八月九日は西山町（爆心地から東約二キロメートル）の配給所に仕事に出かけていました。家族は朝の警戒警報で防空壕に避難していましたが、解除された後、奥さんは三男（二歳）を背負って

隣組配給の豆腐をもらいのでかけ、その後を追って防空壕から出た長男（十歳）は、川沿いで遊んでいました。

その時、原爆が投下されました。防空壕に残っていた三人の子どもに閃光と爆風が襲いかかります。無意識の内に防空壕の壁にしがみつき、泣いていた子どもたちは、避難する大人の後について油木町あぶらぎまちを通り、北西の山に避難したそうです。子どもたちと再会した夫は十日、残りの三人を探し歩き、ほとんど水が涸れた川で亡くなっていた長男の遺体を見つけました。夫は遺体を拾い上げしっかりと抱きしめ、近くの家の焼け跡で火葬にしました。そして、まだ熱い長男の骨を入れた包みをぐっと握りしめ、男涙に堪えながら帰宅したそうです。奥さんと三男の行方は最後までわかりませんでした。

戦後、物不足、食糧難の中で私たち夫婦は育ち盛りの子どもをかかえた不自由な生活が続き、私は極度の貧血で何度も倒れました。しかし、当時は米屋だけでは生活ができませんから、店の隣に「紅屋べにや」というお汁粉屋を開きました。口の中でとろける甘い小豆が評判で「眼鏡橋の紅屋」と言われ、毎日夜十一時まで働かなければならないほどの盛況ぶりでした。途中、貧血で倒れ、肝臓病も併発し、二、三年寝たり起きたりの生活が続きました。そのため店も止めました。

ある事情で借金もでき、家族に迷惑もかけるので、三七歳の時に形だけ離婚しました。そして東京に出て働き、家族には送

金を続けました。後に借金も返し、夫と再婚しました。夫は一九八一（昭和五六）年、七五歳で亡くなりました。被爆者として最後まで苦勞を負った人生でした。

戦後しばらく、子どもたちは下痢が続き苦しみました。治った後も被爆の影響は続きました。結婚した息子の最初の子どもは、悪性腫瘍をもって生まれ、手術の甲斐もなく生後四か月で亡くなりました。娘たちの最初の妊娠は流産でした。娘たちは貧血病で薬を飲み続けています。

原爆の毒は一生離れない

私は、大正生まれで苦勞も多く、波乱はらんぼんじょう万丈の人生でした。死ぬ時は安らかに死にたいと思っています。原爆の毒を吸うと一生体から抜くことはできません。

原爆は人を殺し、国を滅ぼす罪悪なものです。だから、世界にあってはならない。地球があって、人がいて、幸せに人生を送り、生きてゆく。そこに原爆の毒が落ちたら、みんな滅びてしまいます。みんなが幸せになるために、私の体が動く間は原爆の恐ろしさを若い人に話をしたいと思います。

聞き書きを終えて

私たち三班の二回目の聞き取りは、夏休みももう終わる八月二九日でした。この日お話を伺うことになっていた相川さんは、長崎で原爆にあわれた方で、本も一冊書いているし、お話もとても上手だと聞いていたので私も頑張って記録をしなければ、と思っていました。

聞いていた通り、相川さんは話されることが、とても慣れている様子で質問にスラスラ答えが返ってくるので、驚きの連続でした。

今回（一回目も含めて）お話を聞いて一番に感じたのは、戦争・原爆の恐ろしさでした。私にとって、戦争についての話をこんなに詳しく生々しく聞いたのは初めての経験だったので、今でも強く心に残っています。

ここで学ばせていただいた貴重な経験は、来年五月に迫る修学旅行に生かしたいと思います。また、被爆者の方々の希望でもあるように戦争・原爆の恐ろしさは、私たちが語り継いでいきたいと思っています。本当に貴重な経験をありがとうございます。

中学生・女子

八月二九日は第二回目の聞き書き活動の日でした。慣れたせいか一回目よりは緊張していませんでした。

相川さんは生まれてから何度も戦争のために各地を点々としたようですが、私は戦争のためというのがすごくいやな気分になりました。でもいろいろと相川さんはがんばったと聞いてがんびりやささんなんだなと思いました。私だったらどうなっていたかわかりません。原爆が落ちてからは「紅屋」というお店を開いたそうです。お店をひらくというのがなければなくてはならないことだと思います。

相川さんは「原爆は世界にあってはいけない」とおっしゃいました。私もそう思います。武器も世界にあってはいけないものだと思います。戦争のない地球になってもらいたいです。だから私達若者が努力しなければいけません。

中学生・女子

相川さんの人生は、まさに戦争に大きく翻弄された人生である。

まず、相川さんは日本の植民地であった朝鮮の「京城」（今のソウル）で生まれた。その後、同じく植民地の中国の大連の伯父に預けられ、看護婦になるまで育てられた。一人前になり、

母親の元に戻るが、東京で大空襲を受け、疎開のため、長崎の伯父の家へ身を寄せた。

その長崎で相川さんは被爆した。親戚の安否を確かめるため、長崎市内に入った相川さんは、そこでさまざまに変貌した人間の姿を見た。そして、そのうち、感覚が麻痺したのか、怖さを超越し涙も出なかったそうだ。私は身の気がよだつような気持ちになった。人間は、どんなむごたらしい光景や行為にも、いつかは慣れてしまうのだろうか。原爆、虐殺、殺し合いなど、戦争によってもたらされる悲劇は、いつか日常になってしまっのか、ということを考えずにはいられない相川さんの証言だった。

戦後、自ら苦勞をしょい込むかのように、相川さんは原爆で妻と子を失った、自らも被爆者である男性と結婚した。生き残ったが、被爆した子供も育てると決心した。子供達も相川さんも被爆による後遺症に苦しみながら。

相川さんが子供のことを話す表情は、他の話の慎痛な面持ちとは一変し、はなやいでいた。相川さんの、苦勞を苦勞とも思わない明るい考え方や努力家であることが、相川さんの波乱の人生を支え、実の子でない子供達との強い絆をつくり上げたのだろう。

八十二歳というお年にもめげず、^{ハッパ}潑刺と長広会で活躍されている今が、相川さんの人生で一番穏やかな時なのかもしれない

と感じた。この相川さんの安心して暮らせるささやかな幸せがいつまでも続くよう願い、そして、そうでなければならぬと、人生が刻まれた相川さんの顔を見て思った。

原 幸 恵

相川さんの体験を聴いて、どんなに原爆の被害がひどいか、改めて知ることができた。

あらゆるものを破壊しつくした原爆。本当にもう「こわい」の一言である。

惨状のさなかについて、こわい、なんて感情を超越してしまっただという相川さん。

原爆とは、あらゆる人間性をも奪うものなんだ、と思った。

原爆にしろ、戦争そのものにしろ、人間性を奪われることが一番こわい。

二度とそのようなことがないように、これからも相川さんには、いつその活動を期待したい。

大 野 早 苗

相川さんは元気です。証言の当日は、風邪が続きリンパ腺が腫れていたそうですが、声は力強い。苦勞の人生が自らを努力

家にさせたと言うことに納得します。

相川さんは一九八三（昭和五八）年に『アンゼラス』の鐘に祈りて」という体験記を冊子にしました。「アンゼラスの鐘」はラテン語で「天使の鐘」という意味。長崎市の被爆で奇跡的に残った浦上天主堂の鐘もその一つです。相川さんが体験記を書かれたきっかけは、日本放送協会勤務だった宮地明男さんが証言の聞き取りをされたことでした。相川さんは、「一被爆者の生きざまを自分たちの上に置きかえ真剣に考えて行こうとする態度に深く感動した」そうです。この感動が体験記をまとめる勇気を作りました。

戦争と被爆でゆれた人生を伝えることが相川さんにしかできない役割だと思えます。今回の私たちの証言聞き取りが、語り部として長生きしてくださる力になればと祈っています。

塚本晴彦

（二二歳）

